雑誌『人の噂』と中村彌六・細井肇

金山泰志

はじめに

本稿は、従来注目されることのなかった雑誌『人の噂』について、その史料的意義を明らかにするものである。具体的には、当該雑誌が中村彌六や細井肇といった人物を研究する上で、有用なメディア史料であることを明らかにする。

執筆者は、「中村彌六研究会」[1]での活動を通じ、『人の噂』という雑誌の存在を知った。

中村彌六（一八五五～一九二九年）は、明治・大正期日本の林学者・政治家である。政治家としての中村は、長野六区から出馬し当選、その後も衆議院議員を計八期務めている。第一次大隈内閣では司法次官となり、正五位に叙せられた。しかし、一八九九（明治三二）年に起きた布引丸事件、翌年の恵州蜂起に関係し、様々な「背徳行為」[2]

の疑いを受け、一九〇〇年一二月六日に憲政本党から除名処分となった。中村を有名にしたのが、布引丸事件と恵州蜂起における「背徳行為」であり、その時の否定的評価が現在に至るまで語られ続けている。[3] 中村彌六研究会では、布引丸事件を主軸とした中村の評価を、様々な史料のつき合わせにより再考することを試みている。その史料の中で重要なものの一つが、中村彌六自身が布引丸事件（恵州蜂起含む）を回顧した『布引丸事件秘録』（一九二八年版）である。[4]

雑誌『人の噂』では、この『布引丸事件秘録』に関する特集記事が、一九三〇（昭和五）年の七月から三か月連続で組まれている。中村彌六と布引丸事件に関する重要な史料が、当該雑誌に掲載されていたことが判明したのである。しかし、ここで問題となるのは、『布引丸事件秘録』の特集記事が、なぜ当該雑誌で組まれたのかということである。史料として『人の噂』を扱おうとする場合、当該雑誌がそもそもどのような性格の雑誌であるかという史料批判が必須であることは言をまたない。しかし、『人の噂』について触れられた歴史研究は管見の限りなく、『人の噂』という雑誌メディアそのものの検討が、第一に必要であった。つまり、本稿は『人の噂』の解題的研究という側面を持つ。

また、『人の噂』そのものの研究は、細井肇という人物を知る上でも重要な意義を持つ。細井肇については、本稿で詳述するが、『人の噂』の発行社である月旦社の社長であり、責任編集者である。また、「朝鮮通」として評論家（知識人）の一面も持っている。細井肇に関する先行研究では、「朝鮮通」としての細井にのみ注目が集まっており、細井と『人の噂』について考察したものはない。本稿では、『人の噂』そのものの検討が、細井肇研究にとっ

ても重要であることを示す。

一．『人の噂』という雑誌について

『人の噂』は、月旦社が一九三〇（昭和五）年四月に創刊した人物評論雑誌である。前述した通り、細井肇が責任編集である。[5] 創刊号は一冊二〇銭であった。

「人物月旦」という言葉があるが、これは人物批評・品定めの意味で、「月旦」とは、毎月の朔日（一日）のことである。後漢の許劭と従兄弟の許靖が、同郷の人達を批評するのが好きで、毎月一日、そのテーマを変えては郷党の人物について論評し合ったという故事に由来する。[6] 当時の日本において、『人の噂』以外に専門的な人物評論雑誌がない、と誌面では誇っている。[7]

現在、復刻版などはなく、最も多くの号を所蔵しているのが国会図書館で、「一巻一号（一九三〇年四月）、一巻二号（一九三〇年五月）、一巻七号（一九三〇年一〇月）、一巻八号（一九三〇年一一月）、一巻九号（一九三〇年一二月）、二巻一号（一九三一年一月）、二巻三号（一九三一年三月）、二巻四号（一九三一年四月）、二巻五号（一九三一年五月）、二巻六号（一九三一年六月）、二巻八号（一九三一年八月）、三巻一号（一九三二年一月）、三巻四号（一九三二年四月）」の閲覧が可能である。その他、高橋新太郎文庫に「一巻六号（一九三〇年九月）、八巻七号（一九三七年年七月）、九巻一一号（一九三八年一月）」の所蔵が確認できる。欠号が多いことは、従来『人の噂』

が看過されてきた一因といえる。しかし、本稿で明らかになる通り、閲覧可能なものだけでも、当該雑誌の史料的価値は十分に確認することができる。

以下、実際の誌面の記事をもとに、当該雑誌の性格を見ていこう。

『人の噂』の創刊号を見てみると、「誌名を決定する為め、同人の間にだいぶいろ〳〵の意見があつた。『人物』とか『月旦』とか、其他十数種の誌名が挙げられたのであつたが、そんな堅苦しい誌名では、肩が凝る、碎けて『人の噂』としたが能いとの、雑誌の販売には其道の随一人者である某顧問の言に、トウ〳〵それに確定した」[8]と、誌名が決まるまでの紆余曲折が記されている。

そして、責任編集者である細井肇の発刊の言葉が続く。

今や、日本の姿は善悪美醜、みな世界の鏡にうつる。胡魔化しは直ぐ剥げる。真剣の実力だ。そこで『人』が第一義だ。フーヴァーだ、マツクだ、ムソリニだ、スターリンだ、蒋介石だ、ガンデーだ、で世界が動く。濱口か犬養か、で一千三百万選挙民の血が湧き返る〔中略〕

国家の隆替も、事業の消長も人だ。議事堂の建物が如何に壮大でも、そこに群ひ集まる四百頭顱が腐り切つてゐては、政治は闇であり浄化などは以つての外である[9]

以上のように述べ、腐りきった政治家への筆誅を宣言し、「政界の浄化」の必要性が説かれている。

また、雑誌のもう一つの目的として、「全国都鄙いづれの地を問はず、有名と無名に論なく、男も女も、老ゐたるも幼きも、優れたる特異の人格は、誌上、全力を挙げて之を推奨せん」と述べ、世に「埋もれて顕れない人」を推奨すると宣言する。具体的には、一巻九号、犬飼時男「塵の世に光る白玉＝健気な少女・井出姉妹の美談＝」のような顕彰記事が象徴的である。[10] また、翌年の新年号（二巻一号）での懸賞募集なども、「（1）私の尊敬する貞烈の婦・義侠の人（2）私の尊敬する公共奉仕の人（3）私の尊敬する隠れたる名人・達人（4）私の尊敬する事業主・雇主（5）私の尊敬する従業員・店員」[11]と見え、『人の噂』ならではの懸賞募集が行われていることが確認できる。しかし、編集部によると、表彰すべき善人に関する原稿や投書は少ないのだという。「反対に悪口を書き列ねた原稿や投書は、編輯の机上に山積する」[12]と述べられている。

以上の点は、「本誌の二大特色」として、以下のように具体的に示され、投稿が呼びかけられている。

誌上の審判　官権の圧迫に虐げられてゐる人　非道な資本家や雇主に苦しめられてゐる人　悪辣な地主や因業な家主に不平でゐる人　新聞や雑誌で無実の罪を誣ゐられた人　暴利独占の会社や営業主に不満でゐる人　無頼漢の為めに苦しめられてゐる人　閥や情実の横暴に不満でゐる人

誌上の表彰　犠牲的精神の人　義侠の人　忠・烈・孝悌の人[13]

この細井肇の言葉を借りて、『人の噂』の特徴を説明すると、「人を通じて政治を論じ、人を通じて事業を説き、

人を通じて芸術を評し、人を通じて社会を判じ、人を通じて国家の興亡と民生の禍福を検討する」雑誌、ということになる。

創刊から翌年の二巻一号では、細井肇から「どのような基準で人物を評論するのか」が、改めて示されている。

（一）月旦社同人は、道徳を標準として人物を評論する。全体道徳を標準とせずして何を標準とするのであるか。

（二）好んで個人悪の欠点を暴露するは、われ等の執らざるところである。が、社会悪国家悪を平気で行ふところの権奸に対し、黄金魔に対しては、断乎、筆誅する。現代に賞め立てるやうな人物は、さう沢山は無い。あれば、誰が何と云はうとウンと褒める。

（三）政治の主義としては悪に強き政友会を抑え、善に弱き民政党を鞭撻する。われ等の眼中に党派は無い。区々党人輩に恩怨は無い。政友会といへども、積悪を悔ゐて、大衆と倶に進むとならば、何時にても之を扶け、民政党いへども、驕泰自恃大衆に背かば、完膚なく痛撃する。われ等は党派よりも、国民と国運とを思ふの念に燃ゆる。[14]

ここで注目すべきは、「悪に強き政友会を抑え、善に弱き民政党を鞭撻する」と、『人の噂』の政党認識が読み取れることである。

ここから、前述の『布引丸事件秘録』（中村彌六）の特集記事が組まれた理由の一端を、うかがい知ることができよう。特集記事が組まれた当時の政友会の総裁は犬養毅であり、犬養は中村が布引丸事件に関わるきっかけを作っていた。特集記事の冒頭では、中村と犬養がかつて同志であり、「共に責を分つべき」ものであったが、犬養は中村を救おうともせず、「却て巨石を打ち着けて一挙に之を殺す様な事」を行い、中村が「其仕打を憎」んでいたことが紹介される。[15] 続けて、中村の「呪の的」が「今を時めく政友会総裁犬養毅」であったと指摘する。『人の噂』が「悪に強き政友会を抑え」る雑誌であったことと、『秘録』が犬養への批判を多分に含んでいたことは無関係ではないだろう。『人の噂』と犬養毅に関する記事については、後述でさらに分析する。

記事の種類は、政治（政界、無産政党など）、国際関係、経済、企業、宗教、[16] 学問（学校関係）、[17] 芸術（歌舞伎、映画）、[18] スポーツ、女性、日本社会（アングラ、ナンセンス）、漫画など、多種多様であるが、[19] その軸は「人」である。

また、本文記事の外に、「読者の声」という読者投稿欄も設けられている。例えば、一巻九号の新潟県井口国兵の投稿では、「私は創刊以来の読者です、固苦るしい政治、経済、社会の勉強の為めに、人を通じ人をめぐつた事実の発表を生命とする本書がどんなに役立つか知れません　政治、経済の専門の書物に入る迄の善良な案内者であり親切な指導者だと思ひます」とあり、『人の噂』が政治・経済の案内書・指導書として読まれていることがうかがえる。二巻四号では、「同一地方における読者の交友親睦を図る為め特別欄「各地読者会」を創設」することが発表され、読者会も組織されている。

記事の執筆者は、ペンネーム（匿名）の者が多い。人物を評論、あるいは筆誅する『人の噂』という雑誌の性格が、匿名の多さに繋がっているものと考えられる。二巻一号の「編輯室」では、「みなペンネームで書いてゐるので、読者諸君の中には物足らぬ感を抱かれる方もおありのやうですが、別におもふところあつて、一切匿名、変名を用ゐてゐます」「四五の筆者以外は、全部ペンネームで通してゐます。今後も通します」とあり、匿名の記事ばかりで不満に思っている読者の存在を知りつつも、匿名のまま今後も続けていくことが明言されている。

（一）月旦社について

創刊号（一巻一号）を見ると、目次に「月旦社後援諸名士芳名様」とあり、「顧問」「社友」として月旦社を後援している人物の名があがっている。社友は、「特別寄稿家として誌上に玉稿を寄与」する立場で、陸軍大将、評論家、弁護士、支那協会理事、早稲田大学教授などの肩書をもった人たちが名を連ねている。

注目すべきは、顧問に名があがっている「吉野作造」である。実は、『布引丸事件秘録』の特集が組まれた、一巻四号・五号・六号は、国会図書館にも所蔵がない。しかし、顧問であった吉野作造がこの三回分の連載頁を切り取り、小冊子のような形にして残していた。これが、東京大学明治新聞雑誌文庫に所蔵されていたことで、特集記事の内容を知ることができたのである。[20] 吉野以外の顧問には、横山勝太郎（代議士）、町田経宇（陸軍大将）、木田伊之助（陸軍少将）、山縣五十雄（前ソウルプレス社長）、下中彌三郎（平凡社社長）の五人がみえる。

月旦社は、『人の噂』の出版だけでなく、「人物伝記編纂」「文章又は演説原稿代作」といった付帯事業も行って

いた。[21] 創刊の翌年には、新たな付帯事業として「月旦社倶楽部」が創設されている。[22]

三巻一号の「社告」記事では、「本社の社運が隆昌に赴くに連れ、各地に本社員の名を騙りて購読料を前取りする者あり」と、読者へ注意喚起が行われている。「先に和歌山県、奈良県、其他四国各県に被害頻々たりしが、最近東北各地を水野又は鈴木等の名を用ゐて埼玉県、茨城県、栃木県をさまよひ居る様子に有之」と、その被害地域が具体的に紹介されている。「本社の社運が隆昌に赴くに連れ」とあるように、月旦社社員の名を騙る者が出てくるほどに成長していたことがわかる。

（二）月旦社社長「細井肇」について

既に名前があがっている細井肇について、ここではさらに詳しく見ていく。

細井は、明治から昭和期にかけて活躍した新聞記者・評論家である（一八八六年二月～一九三四年一〇月）。一九〇八（明治四一）年に朝鮮に渡り、内田良平らの日韓合邦運動を支援、一九一三（大正二）年～一九一八年には東京朝日新聞社記者となる。一九一九年の三一独立運動を機に朝鮮への傾倒をさらに深め、一九二〇年には朝鮮関係書籍出版社として自由討究社を設立した。一九二七（昭和二）年には、ジュネーブ軍縮会議の斎藤実全権に随行している。一九三〇年に月旦社を設け、『人の噂』を発行、のち『人と国策』主宰。著書に『朝鮮文化史論』『朝鮮問題の帰趨』『女王閔妃』『国太公の眦』『日本の決意』などがある。[23]

以上が細井の略歴であるが、細井に関する個人史研究が従来十分に行われているとは言い難い。細井に関しては、

主にその朝鮮観が着目されており、高崎宗司『妄言の原型―日本人の朝鮮観』（木犀社、一九九〇年）、池内敏「細井肇の和訳『海游録』―大正期日本人の朝鮮観分析をめぐる断章―」（『超域的日本文化研究』七号、二〇一六年三月）、欄木寿男「大正期における朝鮮観の一典型」（『法政大学近代史研究会会報』八号、一九六五年）、青野正明「細井肇の朝鮮観―日本認識との関連から―」（『韓』一一〇号、一九八八年）などが見られる程度である。高崎は、細井を「朝鮮総督府の統治政策に協力した代表的な御用言論人である」と断罪、その朝鮮観を「朝鮮民族性悪論」と指摘し、青野論文と同様に細井を厳しく批判する。欄木論文でも、「朝鮮通」の細井であっても朝鮮蔑視観を脱し切れていたか疑問が残ると指摘されている。

韓国においても、細井によって日本語訳された朝鮮の古典作品ついて分析が行われているが[24]、それらは青野や高崎によって示された枠組みを追認しているにすぎない。これらに対し、近年の研究である池内論文では、細井の否定的朝鮮評価を前提にした従来の研究の問題点が指摘されている。

以上の細井肇研究に共通するのは、彼の朝鮮観にのみ焦点が当てられているという点に加え、本稿で取り上げている雑誌『人の噂』への言及がほとんどないという点である。細井の著作や翻訳書が注目されるのであれば、細井肇が中心となって編集され、自身も記事を執筆した『人の噂』は、大変重要な史料であるといえる。『人の噂』を詳細に検討することは、今後の細井肇研究において大変重要な作業になると考えられる。

例えば、『人の噂』の創刊号では、月旦社の顧問や社友から、細井への激励の言葉が寄せられており、他人の目に映る細井の評価をうかがいしることができる。当然その評価は、肯定的なものばかりであるが、細井の経歴や仕

事ぶりが裏付けられることから貴重な史料ともなる。

月旦社の顧問である平凡社の下中彌三郎は、「政治記者として細井君ほど活躍した人はない」と述べ、「細井君は反抗児だ。社会悪、就中、勢力を恃んで悪事を働く財閥擁護の徒輩に対する反抗心は実に烈火だ」「月旦社の信条と使命は、直ちに細井君の人格の反映だ」と評している。[25] 政治記者としての一面が読み取れよう。

同じく顧問の山縣五十雄は、「最近に、たいさう立派な朝鮮宮廷秘話、国太公の眦を恵投されたのであるが近来これほど有益で面白い本を読んだことが無い。私は細井君が此の方面に於いても実にすぐれた筆の所有者である事を知つて驚嘆した次第であります」と紹介する。[26] ここからは、細井の朝鮮通としての一面が読み取れる。

月旦社社友の島中雄三（文化学会主幹）は、「社会運動の同志として初めて君を知つたのは、その雄勁なる文章を通してゞあつた。（中略）大逆事件以後同志漸く離散するに及んで君は専ら朝鮮問題の研究に没頭し、後ち聘せられて東京朝日新聞政治部に入つて以来、細井肇の名は漸く操觚界に顕著なるものとなつた」と述べており、[27] 社会運動家として知られていたことも確認できる。

創刊以来、『人の噂』の中心にあった細井であるが、三巻四号において月旦社社長を辞任したことが報告されている。辞任の理由については、「最近、時局多難、政界頗る多事を加ふるに連れ、不肖としては、勢ひ従来の如く社務を見ること能はず」と述べている。[28] これより二年後、細井は四十九歳をもって、その一生を閉じた。『人の噂』は、晩年の細井が関わっていたメディアであり、細井を知る上で重要な史料なのである。

二、雑誌『人の噂』の記事内容

ここからは、実際の記事を見ていくことで、雑誌『人の噂』の性格や特徴を明らかにしていく。特徴については、目次から多くの情報を得ることができる。例えば創刊号以降の目次に添えられた「われ等の信條　侠・熱・血・誠」「われ等の使命　悪の膺懲・善の推奨」の言葉は、『人の噂』の特徴をわかりやすく読者に示している。

二巻六号の目次には、「我等の標識」として、以下の五か条があげられている。

1　新日本建設の最前線へ　八千万国民を総動員せよ!!
2　怠けもの、無理想もの退治　能率百パーセント主義の強調!!
3　社会改造の前路を塞ぐ　資本悪、政治悪、社会悪の撃滅!!
4　亜細亜諸民族と契盟して　白人の世界制覇を打倒せよ!!
5　われらの信條―　侠・熱・血・誠!!

『人の噂』創刊号で、細井は政治家への膺懲を宣言していたが、膺懲の対象は政治家に留まらない。例えば、一

巻七号「暴利貪欲を極むる火葬場博善社」、一巻八号、米友武雄「バカ殿様か大詐欺師か　乃武男の嗣子神田金樹」、同号、紅毛醉人「日本華族と金髪美人＝在外邦人の変態愛欲生活」、二巻三号、斬水無刀痕居士「日光の怪聞（金谷真一を葬れ）」、二巻五号、矢之原静児「書壇の腐腸大家連」など、華族や資本家、文人にまで及ぶ。

（一）　政治（政界）に関する記事

政治（政治家）に関する記事は、『人の噂』のメインコンテンツの一つといって差し支えないだろう。それは、編集責任者である細井の政治に対する強い意識が、誌面に反映したものと考えられる。細井は、『政争と党弊』（益進会、一九一四年）や『閥族罪悪史』（大鐙閣、一九一九年）といった日本政治に関する著作も執筆していた。

『人の噂』から浮き彫りになるのは、政治に対する嘆きである。例えば、細井自身が執筆した記事では「実に、一君万民のわが国体を無視し、君民の間に介在し、政治と政略とを混同して、マキアベリズムの権詐に一世を欺罔し、上聖旨に悖り、下万民を蔑ろにしたるものは、往年の閣僚政治家に外ならず候。この輩、権力と金力を以つて、党人を操縦し、つぶさに政界腐敗の禍根を植う」「憲政の大道を照明にし、比較的清新なる「憲政」の組織を切望する次第に御座候[29]」などと見える。その他、「呆れ果てた党人どもの政治[30]」「既成政党は、全く其の弾力を喪失した。今日其の残骸を存するは、たゞ惰性の賜ものに外ならぬ。弾力は生命の活動であり、惰性は残骸の幻影だ[31]」などと嘆かれた記事が散見する。

政治関連の記事では、無産党に関する記事も多く、例えば、一巻八号、無名隠士「無産党人物大観」、二巻四号、

島中雄三「無産党が合同するとして」、二巻八号、兎川寛二「無産陣営の雄弁家」、三巻四号、兎川寛二「無産派議員の新顔」、三巻四号、八代谷七「無産闘士・裏の裏」などの記事が確認できる。一巻二号、月旦社編輯局「無産党と其の人の動き」という記事では、「五年後、十年後の日本をおもふ時、無産党の動きは実に重大である。第一線上に立つ人々の、懸命必死の努力は勿論であるが、今後続々無名の人物が台頭して、次の時代を担任しなければならない」と述べられており、「無産党の動き」が今後「重大」であるという認識から、「無産」関連の記事が誌面に掲載されていたことがわかる。

（二）犬養毅に関する記事

前述の通り、中村彌六の『布引丸事件秘録』が『人の噂』に掲載された要因を考える上で、誌面の犬養毅に関する記事の存在は重要となる。

『人の噂』が、政友会に対して友好的な雑誌ではないことからもわかるように、政友会総裁であった犬養毅に対しても、否定的な内容の記事が多い。それは、創刊号から「犬養自身が偽善の假面を被り虚喝の舌根で五十年の政党生活を送つたのぢやないかナ」「犬養にたいしての教養があらうとも思はれぬ」といった調子である。(32)

特に重要となる記事が、次に掲げる一巻二号、空不空庵夜話「雷総裁と条太郎親分」という記事である。

犬養といふ男はナ、なか〳〵の狸ヨ。中村彌六の辰丸事件〔布引丸事件の間違い〕などでも、世評は全く事実

を知らずに誤りを伝へとる。事、国際問題に関し隣誼に影響を及ぼす為め、彌六も、寃をそゝがずに怨みを嚥んで、そのまゝねむりおツたが、君達の雑誌で事実を率直に天下に公けにすることも、明治政史の上に、大事業ぢやぞヨ。綜じて、犬養は、清貧に甘んずる人格者のやうに伝へられとるが、大違ひぢや。〔中略〕世間では犬養を清廉潔直の士のやうにいふが、犬養ほど金に汚い奴はおらぬ。ふんだんにサヤを取つて、澄しとる。〔中略〕犬養は陰険ぢゃワイ。スル事が汚い、狸ぢや。

前掲「月旦の標準」に「黄金魔に対しては、断乎、筆誅する」とあったように、「金に汚い」とされた犬養は筆誅の対象であった。そして、この記事で最も重要なのは、「中村彌六の辰丸事件〔布引丸事件の間違い〕」を「君達の雑誌で事実を率直に天下に公けにすることも、明治政史の上に、大事業ぢやぞヨ」と、布引丸事件に関する特集記事掲載の予告が見て取れることである。この記事の二か月後（一巻四号）に、布引丸事件の特集記事は掲載されている。この特集記事の検討は、中村彌六のメディア評価を考える上で重要な作業となるため別稿に譲るが、記事の反響は大きかったようである[33]。

誌面上の犬養に対する評価は、その後も変化はない。例えば、二巻六号、空不空庵主人「同族剋殺の日本」では「犬養は猿の乾物」「昔日の憲政の神様もトウ〳〵猿の乾物になりおつたかと可笑しうもあつた」、三巻一号、出間剛毅「政局表裏・虚実交響秘聞」では「党員達から除け者にされながら、総裁の椅子に嚙り附いてゐる醜態は何事か」、三巻四号、東海九十九「既成両大政党未曾有の憂患」では「犬養は真個のロボットであつて、大勢を律する

丈けの実力を持合せぬ」などのように否定的である。

（三）　アジアに関する記事：細井肇のアジア認識

『人の噂』のもう一つの特徴としては、アジアに関する記事の多さである。「朝鮮通」として知られる細井であるが、『支那を観て』（成蹊堂、一九一九年）などの著作の存在からも明らかなように、その射程は朝鮮に留まらずアジアという大枠で捉えられていたことが考えられる。

例えば、満州事変後の記事である「内外危局対策座談会」では、司会者である細井が次のように述べている。

支那少数軍閥の反日、抗日、侮日に対しては、勿論膺懲を加へて、必ず反省せしむるだけの処置を執らねばならぬが、支那四億の大衆は、少数軍閥の犠牲に供されてゐる憐れむべき境遇に居るので、国土といふものは借家住居のやうに、気に入らぬから遠方に移すといふワケに行かぬ、千年でも万年でも、お隣り同志に相違ないので、飽くまでも、支那の四億の民心を攪る王道の建前で進まねばならない。この興亜の大業は、勿論三年や五年で達せられるものではなく、われ〳〵の手で及ばねば次の世、後の世までの子々孫々の使命であると思ふのでありますから、たゞ無暗にやつゝける事ばかりを考へてゐても如何かと存じます[34]

「興亜」の問題にも関心を寄せる細井のアジア認識の反映か、『人の噂』にもアジア問題や興亜に関する記事が散

見する。例えば、一巻九号では、「亜細亜問題を実践的に取扱つて行かうとする興亜学塾」が「拓殖大学教授、満川亀太郎氏等によつて」開かれたと紹介する記事が見え、[35] 二巻一号の新年の巻頭言では、「日本人は卑怯であつてはならぬ。男らしかれ、堂々としてアジアの尖端的第一線に勇敢に踏歩しやう」[36] などと語られ、他の記事でも「興亜の大業は、日本独自の手で成し遂げ得るものでは無い。亜細亜全局の同志と手をつないで、互ひに赤心を披露し苦難を倶にしてこそ、始めて成し遂げ得べき千古の大業である」[37] と声高に叫ばれている。

また、誌面は朝鮮に関する記事だけでなく、中国に関する記事も多い。例えば、一巻八号、H・H子「隠れたる対支問題の殊勲者　佐藤知恭氏」、一巻八号「時の寵児・張学良」、二巻一号、中野紀佐夫「新興民国の指導的人物」、二巻四号、村松梢風「民国の新しい男・女」、二巻八号、山下一朗「広東政府の陣容」、二巻八号、寛城子「北満だより」、三巻四号、新村稔「激動裡の支那と要人の動静」などが確認できる。[38] また、それらの記事の中には、「支那人の賄賂とりは、日本人のゲイシャ買ひよりも普遍的」「「タチがよくない」といふ言葉は支那の役人全体の共有物」[39]、「チャンコロ奴を今一度ウント膺懲せずば、そして満洲を全く日本のものとせねばイカン」[40]、「今度といふ今度こそは、暴慢無礼な支那の仕打によく〳〵劫を煮やしたものと見えて」[41]、「支那と云ふ国は排他的である」「支那と云ふ国は大なる国である、秩序の無い国である、便衣隊が跋扈跳梁して居る。そして常に排日的の行動を、続けて居る」[42] などのように、「チャンコロ」といった蔑称や、否定的評価が見られることも見逃せない。当時の日本社会一般における否定的な中国観の浸透ぶりが、『人の噂』を詳細に見ていくことでも実証できるのである。

従来、細井に関しては朝鮮への造詣の深さから、彼の朝鮮観が主に注目されてきたが、その対外思想を総体的に

捉えるには、中国までを射程に含めたアジア観、アジア認識で捉えなおす必要があるのかもしれない。『人の噂』の細井執筆記事（あるいは発言）だけを見ても、「支那四億の大衆」が「憐れむべき境遇に居る」といった発言や（前掲「内外危局対策座談会」）、「乱離滅裂の支那」[43]といった記述が読み取れる。

（四）エログロナンセンスに関する記事

『人の噂』が創刊された一九三〇年代はどのような時代であったのか。当時の時代観も、誌面から如実に浮かび上がってくる。

例えば、一巻一号では「華やかに憂鬱な時代、それが一九三〇年の時代相だ。テンポと、ジャズと、トーキーと、ヒツクルめて云へば、軽浮そのものだ。足が地に着いてゐない」[44]と見え、二巻八号では「日本資本主義は、世界的不況と財政経済政策の不徹底、経済人士の他力本願的偸安、無努力に依つて、今や累卵の危きに置かれてゐる」[45]などのように見える。一巻一号では、細井が社員招聘に関する記事を出しているが、その中で「人からチヤホヤされる事ばかり考へて、自身を向上することを知らぬ、貴婦人御令嬢や、乃至校門を出るなり、成るべくラクな仕事で月給を多く、帰りにはギンブラでもして、カフエーで、ダンスホールでなどと世間も実務もわかりもせず、虫のよい自分勝手な事を考へてゐる大人物は去つて他のブル銀行や会社、乃至郷党の先輩の門でも叩き玉へ。当社は真ツ平御免である」[46]と、断りを入れている箇所も、当時の人々のあり方の一端を思わせる。

また、当時の風俗として象徴的なのが、一九三〇～三一（昭和五～六）年を頂点とする退廃的風俗「エログロナ

ンセンス」である。『人の噂』でも、「モダーン・エロ・グロ・ナンセンス、それは一九三〇年に咲いた華であつた」[47]と紹介され、「エロ」「グロ」「ナンセンス」に関する記事が多く掲載されている。例えば、一巻七号「浅野翁といづれ甲乙なき　三井物産の小林正直君　＝ビジネスも精力も絶倫＝　＝エロにかけても強の者＝」、一巻八号、中野紀佐夫「会社譲渡問題から第二次騒動へ　稀代の守銭奴竹友支配人　キリスト信者のエロ狂ひ」、三巻一号、香春峻「浮世恋しや坑の仲＝坑夫のエロ・グロ・ナンセンスものがたり＝」、三巻一号、小辻現聲「実話ナンセンス三題」など、記事名だけ見ても明らかである。

以上のような記事も、政治や国際関係などの記事を主とする『人の噂』において、人気だったのではないだろうか。読者を獲得し、雑誌をより多く売るためには、様々なジャンルの記事を掲載することは有効である。「漫画漫文エロ讃グロ讃」[48]といった漫画欄があるのも、当時の漫画人気にあやかったものと考えられ、それを裏付けよう。

おわりに

以上、従来あまり注目されてこなかった雑誌『人の噂』の解題を試みるとともに、当該雑誌が「中村彌六」「細井肇」研究において重要な史料となることを指摘した。

『人の噂』を史料に、何らかの検討を行おうとするには、まずはその史料批判が必須であった。しかし、『人の噂』は欠号も多いことから、雑誌そのものが看過されてきた。そのような雑誌においても、ある側面からは大変貴重な

史料（記事）が存在する場合がある。それが、本稿で指摘した中村彌六の「布引丸事件」に関する特集記事であった。中村彌六という人物の評価を問い直すことは、中村彌六の評判に大きな影響を与えた「布引丸事件」を問い直すことである。そして、そのための重要史料が、『人の噂』に掲載されていたのである。本稿では、その『人の噂』がどのような雑誌で、なぜ「布引丸事件」の特集記事が掲載されたのかについても言及した。以上の作業を経て、漸く『人の噂』の掲載記事を、史料として使用することが可能となったといえる。

細井肇については、本人が『人の噂』の責任編集者であり、当該雑誌を出版していた月旦社の社長でもあった。細井肇個人を研究する上で、『人の噂』が重要史料であることは明白であるが、細井肇研究においても、『人の噂』に着目した検討は従来行われてこなかった。細井の数々の著作に加え、『人の噂』も検討することで、細井肇という人物を多角的に捉えることができるようになるはずである。本稿は、その基礎的研究となることを目指した。

註

（1）二〇一七年四月二六日設立。高綱博文氏（日本大学教授）が代表。

（2）一九世紀末のフィリピンで起こったアジア初の独立運動に対し、中村彌六は日本で武器・弾薬を密かに調達し現地に届けるという役割を担ったが、船はフィリピンに到着する前に暴風雨で沈んでしまった。この事件を船の名をとって布引丸事件と呼ぶ。現在通説化しているのは、中村がその船に積んだ弾薬が不発弾であり、独立軍から預かった資金を横領した（「背徳行為」）とする説である。

（3）宮崎滔天『三十三年の夢』（国光書房、一九〇二年）、木村毅『布引丸―比律賓独立軍秘話』（春陽堂、一九四四年）、上村希美雄『宮崎兄弟伝アジア篇中』（葦書房、一九九六年）など。

(4)『布引丸事件秘録』は、一九一二年に中村が梅屋庄吉にあてて書いたものとされるが、梅屋によるとそれはポンセに送られ、日本にその現物は残っていない。しかし、その後謄写版刷りで印刷したものが、一九二八年二月と一九四二年七月・一一月に作成されている。

(5)「人物評論誌を出すといふのは、細井社長が昨年来の宿論」(一巻一号「校正を卒へて」)。

(6)二巻一号「月旦の標準」という記事に同様の解説が見える。

(7)二巻一号「編輯室」。

(8)一巻一号「発刊まで」(目次欄)。

(9)一巻一号、細井肇「人の噂発刊のことば」。

(10)二巻一号には「井出姉妹の奮闘史に感激した」という読者投稿も見える(東京渋谷、三條)。

(11)一巻九号「新年倍大号大懸賞募集!!」(目次欄)。

(12)一巻八号、細井肇「江湖に謹告す」。

(13)一巻一号「本誌の二大特色　投稿歓迎」。

(14)二巻一号、細井肇「月旦の標準」。

(15)一巻四号、相馬由也「秘録を公けにするに当りて」(明治新聞雑誌文庫〔吉野文庫〕「布引丸事件秘録票」〔雑誌『人の噂』の切抜〕)。

(16)例えば、創刊号には天理教糾弾の記事(「天理教の正体」「天理教の罪悪と自分の懺悔」など)がある。

(17)例えば、二巻一号、鞍上火鞭子「学校騒動の醜悪な裏面　早大の内訌争闘と渦中の人物」など。「今や学校騒動は、各所に頻発する労働争議のごとく、随所に勃発する」とある。

(18)二巻六号「編輯後記」によると「劇評、キネマ評が大分ファンの反響を呼んで、ゼヒ特定の紹介欄を定設してくれとの要求に接するので、今月号から案内欄を定設することとした」とある。

(19)一巻一号の記事カテゴリは、「同人語」「世界の動き」「政界と人」「財界語」「照明弾」「女の世界」「侠」「ナンセンス」「声援」、一巻二号は「巻頭」「推奨」「無産」「海の内・外」「ものがたり」「政界と人」「照明弾」「膺懲」「侠」「女」、二巻

一号は「主張」「興亜」「推奨」「月旦」「有産」「新聞人」「変人奇人」「名人傑士」「よみもの」「膺懲」「女」「特輯」「雑録」、二巻四号は、「主張」「大陸」「有産無産」「指導階級人」「特輯」「侠豪」「膺懲」「娯楽」「女」「よみもの」「雑輯」。

(20) 発見者は、中村彌六研究会会員の円谷裕美子氏。

(21) 一巻一号「広告主へご挨拶申し上げます」。

(22) 二巻八号「月旦社倶楽部の創設」では、「われ等にも簡易で軽便な足だまりであり、倶に楽しむ一室があつてもよいとおもふ。ソコで、今度月旦社附帯事業の一として、とりあえず月旦社の客員を中心に月旦倶楽部を創設することにした」とある。

(23) 二巻六号「細井社長の近県出張講演」で、細井の略歴が紹介されている。

(24) 李在烹「細井肇抄訳本『海遊録』」(『韓日関係史研究』四七号、二〇一四年)、尹素英「細井肇の朝鮮認識と『帝国の夢』」(『韓国近現代史研究』四五号、二〇〇八年)、朴相鉉「翻訳によって発見された『朝鮮人』―自由討究社の朝鮮古書翻訳を中心に―」(『日本文化学報』四六号、二〇一〇年)、朴相鉉「細井肇の日本語翻訳本『薔花紅蓮伝』研究」(『日本文化研究』三七号、二〇一一年)。韓国における研究状況については、前掲池内論文に詳しい。

(25) 一巻一号「月旦社後援諸賢の同情と声援」。

(26) 同右。

(27) 同右。

(28) 三巻四号、細井肇「三週年紀念に際して副社長大北筆一氏を月旦社々長に推す」。

(29) 一巻九号、細井肇「今は如何なる秋ぞ　濱口首相に上るの書」。

(30) 二巻一号「新興日本の黎明―昭和六年を迎えて―」。

(31) 三巻一号、細井肇「弾力と惰性」。

(32) 一巻一号、空不空庵夜話「剛腹鐵腸　利用万能空想大禁物の安達内相」。

(33) 一巻七号、細井肇「布引丸事件秘録に就いて」では、「先に本誌に掲げたる布引丸事件真相は、中村彌六氏の秘録に基づき、本社において平明に書きくづしたるものなるが、江湖の反響意外に大にして、各方面より投書山積し、中には、当

時の真相について、事実相違の廉を注意せらるゝ向もある。依つて本社は更に精細調査の上、次号において、各方面の意見をも併せ掲げて江湖の批評に俟たんとす」と見える。

(34) 三巻四号「内外危局対策座談会」。
(35) 一巻九号「興亜学塾」開かる」。
(36) 前掲二巻一号「新興日本の黎明」。
(37) 二巻一号、田邊宗夫「興亜の傑士・マヘンドラ・プラタプ氏」。
(38) 満州事変後には、その関連記事も見える。三巻一号、ラス・ビハリ・ボース「満州事変と国際連盟」、三巻四号、日笠芳太郎「満蒙新国家打診」など。
(39) 一巻二号、大竹博吉「李鴻章にあやまる」。
(40) 二巻四号、寛城生「長春だより」。
(41) 三巻四号、青沼華生「上海に活躍せる我が海陸の将帥」。
(42) 前掲三巻四号「内外危局対策座談会」。
(43) 一巻二号、細井肇「現代日本の人と国策の飢饉」。
(44) 前掲一巻一号「発刊まで」。
(45) 二巻八号「目次の解題」。
(46) 一巻一号、細井肇「男女外交社員招聘」。
(47) 一巻九号「昭和五年の回顧」。
(48) 二巻四号、三太郎「漫画漫文エロ讃・グロ讃」。